ニューズレター　第 107 号・2017 年 7 月

日本カナダ学会　　発行人：下村雄紀　　編集人：福士 純

事務局：〒 658-0032 神戸市東灘区向洋町中 9-1-6　神戸国際大学経済学部　下村雄紀研究室内
TEL:080-3868-1941・FAX:03-6368-3646・http://www.jacs.jp・jacskiu@kobe-kiu.ac.jp
（電話等の受付：水・金曜日・午前 11 時～午後 4 時）　　郵便振替口座　00150－2－151600

第 42 回年次研究大会

飯笹 佐代子

今年の年次大会は 9 月 9 日（土）と 10 日（日）に、大阪の国立民族学博物館において開催します。同博物館の**岸上伸啓**会員が大会実行委員長を引き受けてくださいました。

2017 年の今年はカナダ連邦が結成されて 150 周年を迎え、カナダ、そして日本で様々な記念行事が開催されています。そこで、第 42 回年次研究大会も「連邦結成 150 周年」を記念するにふさわしい場となるよう、大会企画委員会一同はじめ努めてまいりました。学会員や各方面からのご支援とご協力のもと、おかげさまで大会プログラムが決定し、すでに本学会公式ホームページにてご案内しております。

大会企画を進めるに当たって、歴史的な観点からカナダを構成する多様な人びとに注目しようということになりました。その際に先ず挙げるべきは、「ファースト・ネイション（First Nation）」の first の語が文字通り示すように、「先住民」ということで一致しました。本大会では「先住民の〈主権〉」をめぐる諸問題」に関するセッションに加えて、初日の午後に、国立民族学博物館と日本カナダ学会の共催により、「カナダ先住民の歴史と現状」と題する一般公開の国際シンポジウムを開催します。

周知のように、先住民（北米インディアン）およびケベック人（フランス系カナダ人）のナショナリズム研究で知られる歴史学の大家、**ラムゼー・クック**博士の突然の訃報が届いたのは、昨年の 7 月でした。カナダを構成する多様性のダイナミズムを考察する上で多大な貢献をされたばかりか、本学会の発展にも寄与して下さったクック博士への感謝と哀悼の意を込めて、「特別追悼講演」を行うことにしました。講演者としてお招きするのは、クック博士の愛弟子ともいえるヨーク大学の**マルセル・マルテル**教授です。クック博士の退職後、その後継者として現職に就かれました。″A Rare Bird on the Earth: Identities and Nationalisms in Ramsay Cook's Canada″ という、魅力的な報告タイトルをいただいております。業績に、*Le deuil d'un pays imaginé. Rêves, luttes et déroute du Canada français :Les relations entre le Québec et la francophonie canadienne, 1867–1975*（想像された国家の悲哀、フランス系カナダの夢と闘争と危機―ケベックとカナダ・フランス語

（次ページに続く）

JACS Newsletter No.107（July 2017）// **本号の内容**：第 42 回年次研究大会（飯笹佐代子）●**カナダ研究紹介**：ロベール・ルパージュ研究の可能性（神崎舞）●**追悼・大原祐子名誉会員**：大原祐子先生（1937-2017）－日本におけるカナダ研究のパイオニアー（竹中豊）/ 大原先生、安らかに（細川道久）●**自著を語る**：『名を捨てた家族』（大矢タカヤス）●**リレー連載**：なぜカナダ研究をしているのか（第9回）「カナダと私」（榎本悟）●第 42 回年次研究大会へのお誘い（岸上伸啓）●**事務局より**：（第 42 回年次研究大会のお知らせ、「トラベル・グラント」募集について、『カナダ研究年報』第 38 号（2018 年 9 月発行予定）の公募要項、会費納入について（お願い））・・・・・・・・・・・・・・・・・● **編集後記**

圏の関係 1867 ～ 1975 年）（Ottawa: University of Ottawa Press, 1997）や *Langue et politique au Canada et au Québec*（カナダとケベックの言語と政治）（co-authored with Martin Paquet, Montréal: Boréal, 2010）など多数の著作があります。

さて、カナダを構成する移民については、日系カナダ人に着目し、「戦後日系カナダ人史の新たな展開」と題するセッションを設けています。**飯野正子**会員らが進めてこられた、第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人の動向に関する研究の成果が披露される予定です。さらに、シンポジウム「連邦結成 150 年―過去から現在、未来へ」では、カナダの風土や政治制度、文化、宗教の観点から問題提起を行い、今後の展望を論じます。

以上に加え、自由論題では、聴覚障害者をめぐるカナダと日本の比較、ハーバート・ノーマン研究の最前線に関する報告もあり、充実度の高い内容となっています。

多くの会員のご参加を心よりお待ちしております。　（大会企画委員長・青山学院大学）

＊　＊　＊

＜カナダ研究紹介＞
ロベール・ルパージュ研究の可能性

神崎　舞

日本における西洋演劇の研究といえば、これまではヨーロッパやアメリカが中心であった。したがって、カナダの演劇というと、具体的なイメージが湧かないという人が多いのではないだろうか。しかし、ケベック州出身の演出家であり劇作家、そして俳優でもあるロベール・ルパージュ（Robert Lepage, 1957-）は今や世界的に一目置かれる存在となっている。特にルパージュの作品はその演出に特徴がある。彼の演出は、映像や小道具を巧みに使用し、観客の想像力を掻き立てる。筆者はこれまでルパージュ作品の主に上演分析研究に取り組んできた。特定の演出家の研究というと、一見、狭い領域の研究と思われるかも知れない。しかしルパージュの演出は、研究する者の視野を広げ、常に新たな領域へと誘ってくれる。

昨年日本で上演されたルパージュ作品に、『887』（2015）と『トーテム』（*Totem*, 2010）がある。後者はカナダを代表するサーカス集団シルク・ドゥ・ソレイユの舞台を演出したものである。ルパージュの活動領域は広い。これまで、演劇だけでなく、オペラやダンス、そしてサーカスなど、ジャンル横断的に演出を手掛けてきた。たとえば、オペラでは、ニューヨークのメトロポリタンオペラで上演された『ニーベルングの指環』（*Der Ring des Nibelungen*, 2010-2012）、ダンスでは、バレエ・ダンサーのシルヴィ・ギエム（Sylvie Guillem）と、イギリスのコンテンポラリー・ダンサーのラッセル・マリファント（Russell Maliphant）と共同制作した『エオンナガタ』（*Eonnagata*, 2009）などがある。さらに舞台芸術に留まることなく、映画の監督もしている。代表作として、ヒッチコックの映画を下敷きにした『告白』（*Le confessional*, 1995）や、自らの演劇作品を映画化した『月の向こう側』（*La Face cachée de la Lune*, 2003）などが挙げられる。さまざまなジャンルに挑戦してきたルパージュは、異なるものに対して寛容である。演劇を「出会いの場」と捉え、そこに複数のジャンルや言語を積極的に取り入れている。その背景には、カナダのフランス語圏と英語圏の対立が今なお根深く存在している現実があると考えられる。

カナダにおける二言語の問題を扱った興味深い事例は、ルパージュがオンタリオ州出身のゴードン・マッコール（Gordon McCall）と共同演出した『ロミオとジュリエット』（*Romeo & Juliette*, 1989）である。本作品は、モンタギューとキャピュレット両家の対立を、カナダの英語圏とフランス語圏に当てはめ、英仏二言語を織り交ぜて上演した意欲作である。カナダにおける対立を顕在化させながらも、境界を越えた対話の実現を試みた一例である。（本作品を分析し、上演場所となったカナダのプレーリーが、言語で分断された英語圏とフランス語圏を繋ぐ役割を担っていることを証明した拙論は、『カナダ研究年報』第 36 号に掲載）。

ルパージュ作品における使用言語は、フランス語と英語だけではない。たとえば『ドラゴンズ・ト

リロジー』(*La Trilogie des dragons*, 1985)や『太田川七つの流れ』(*Les Sept branches de la rivière Ota*, 1994)では、中国語や日本語なども含めた複数の言語を巧みに取り入れている。さらにルパージュ作品の場合、観客に伝える手段も多様である。映像によるイメージや、身体表現なども巧みに駆使しながら、言語の壁を越えていく。それはルパージュが、カナダにおける言語によって作られた境界を体験したがゆえに、言語に囚われないことを目指している証拠である。

ルパージュは、さまざまな境界を越えることで活躍の場を広げ、フランス語圏はいうまでもなく、英語圏の演出家や劇作家、さらに劇団にも影響を与えている。たとえば、ヴァンクーヴァーを拠点に活動しているエレクトリック・カンパニー・シアター(Electric Company Theatre)が挙げられる。1996年に設立されたこの劇団の創設メンバーは、ルパージュ同様、彼らの作品に視覚的かつ身体的な要素を取り入れている。2015年には、ダンサーであるクリスタル・パイト(Crystal Pite, 1970–)が主宰するキッド・ピヴォット(Kidd Pivot)と共同制作したダンス作品『ベトロッフェンハイト』(*Betroffenheit*)を上演した。ダンスと演劇を融合させて登場人物の内面の苦悩を表現した本作は、国内外で高く評価され、2017年もツアー中である。エレクトリック・カンパニー・シアターはヴァンクーヴァーという地域に根差しながらも、近年、海外での公演にも積極的で、国際的なカンパニーに成長しつつある。このように、他の演出家や劇作家、そしてカンパニーとの直接的・間接的な影響関係を見ていくこともまた、ルパージュ研究の醍醐味である。

従来のカナダの演劇研究では、ケベックのものはフランス語圏の文脈の中で、そして英語圏のものは英語圏の文脈で頻繁に語られ、しばしば両者は分断されていた。しかし、ルパージュを研究するということは、そのような言語の違いが生み出す境界を越えることを意味する。

筆者は現在、ルパージュ研究やエレクトリック・カンパニー・シアターの研究と並行して、各地で開催されている演劇フェスティヴァルの研究にも取り組んでいる。カナダのフェスティヴァルに注目するに至ったのは、これもまたルパージュが国内外のフェスティヴァルに頻繁に参加して自身の作品を上演してきたからである。他国からのアーティストが参加する国際的なフェスティヴァルは、カナダという地域と他国を、すなわち人と人を繋ぎ、相互理解を深める場である。ルパージュ作品の上演分析研究から始まった研究は、新たな研究分野へと筆者を導き、さらなる大きな可能性を提供してくれる。　　(摂南大学)

＊

＜自著を語る＞

ジュール・ヴェルヌ(大矢タカヤス訳)『名を捨てた家族』(*Famille Sans Nom*)(彩流社、2016年)

大矢 タカヤス

1763年のパリ条約によってルイ15世が北アメリカのフランス植民地をイギリスにまるごと投げ出して以来、そこで生活していたフランス人および彼らの子孫はイギリス植民地住民として、つまりイギリス国王の臣民として生きることになった。だが支配者が代ったからといって、言語、生活習慣、信仰などが一朝一夕に変えられるわけがなく、それらを変更させようとする有形無形の絶えざる圧力に耐えて、彼らは今日まで生き延びてきた。だが、その間に溜め込まれた鬱屈が時折マグマのように地表に出ようとするのは当然で、「静かな革命」や1995年の州民投票などはその具体的な顕現であろう。そしておそらくもっとも血なまぐさい例が、1837–38年に起こったケベックの叛乱である。多くの「たら」「れば」を濫用しての話だが、ロワーカナダにフランス系政府が誕生したかもしれない状況だったのである。そうなっていたら、今のカナダはどのような様相を呈していたことか！しかし、歴史はこの試みが徹底的に叩きつぶされたことを教えている。フランス系有力者の大部分が、戦死してしまった者たちは別として、逮捕されるか、あるいは逃亡したままで起訴され、そのうちの12名が絞首刑に処せられ、58名が主にオーストラリアに流刑となった。

そしてこの事件が、「驚異の旅」シリーズへの

長編小説のネタを探すために日々の新聞、世界各国の風俗を伝える雑誌、見聞録、歴史書などを広く渉猟していたジュール・ヴェルヌのアンテナにひっかかったのである。なぜこの時期かというと、おそらくローラン＝オリヴィエ・ダヴィッド著『1837ー1838年の愛国者たち』が1884年にモンレアルで出版されたことと無関係ではあるまい。この本はイギリスの植民地政策に反抗して武器を取った愛国者たち、フランス系カナダ人への熱烈な讃辞でもある。フランス人であることを誇りに思っていたヴェルヌの琴線を揺らし、創作意欲をかき立てたのであろう。彼は作中で直接この著者の名を挙げているし、戦闘場面の記述は（固有名詞の綴りの誤りも含めて）この著作に負うところが大きいように思われる。ちなみに、本書のプレオリジナル版は1888年1月から12月まで「教育と娯楽」誌に連載されているので、時期的にも矛盾がない。

本書『名を捨てた家族』の主人公とその周辺を固める人物たちは作者の想像の産物だが、彼らが実在した人物たちの間に巧みに配置されて主要な史実がほぼ正確に再現されているので、読者は物語を追いながら、1837年にサン＝ローラン流域でなにが起こっていたかがおおよそ頭に入る。ただそこに至るまでの経緯は当時のフランス人読者にとってまだ遠い国の、あまり馴染みのない歴史に属していたに違いない。ヴェルヌが第1章の初めの数ページを割いてカナダの歴史のおさらいをしているのはそのためであろう。

物語はこの歴史と作者の創造が巧みに撚り合わされて進行する。たとえば、架空の主人公たちの劇的な結末はもちろん作者の創造だが、ナイアガラ瀑布でのカロリーヌ号の悲劇は、ロワーカナダではなく、アッパーカナダの叛乱の際に実際に起こった事件である。ヴェルヌは船名はそのままで、時期を1年遅らせ、背景をロワーカナダの叛乱に入れ替えて事件を語ったのである。練達の物語作者ならではの虚実皮膜の業であろう。ヴェルヌが実際にナイアガラ瀑布を訪れていることも、このナヴィ島（英語読みならネイヴィ）を舞台にした挿話が精彩に富んでいる原因かもしれない。1867年、彼は弟と一緒にグレイト＝イースタン号で旅をしたときにアメリカ合衆国に上陸し、相当な強行軍であったに違いないが、ナイアガラまで瀑布を見に行ったらしい。彼の伝記を書いたアロット・ドゥ・ラフュイは「無数の虹が乱舞する、この轟々たる水晶の落下の思い出は崇高な光景として、いつまでもジュール・ヴェルヌの脳裏に留まるだろう」としている。二十年以上待ってヴェルヌはこの光景を作品の中に蘇らせたことになる。

この小説はまた恋物語でもある。「脅威の旅」全作品に精通しているわけではない訳者の皮相な印象に過ぎないかもしれないが、硬質で男の世界と感じていたヴェルヌの世界で、クラリ・ドゥ・ヴォードルイの羞じらい深く、しかし決然たる恋慕の念は相手のジャンの心に届いただけでなく、読者の胸も打ち、灰色の作品世界にほんのりと艶やかな色合いを与え、一種の和みのようなものを醸し出している。

本邦においては、明治31年（1898年）に森田思軒が『無名氏』という題名で翻訳を出している。英語版からの重訳であろうが、これを仏語の原作と比べると相当な改変が加えられていることが分かる。2言語間の表現上のズレが生じるのは仕方ないこととしても、原作で狂言回し的な役を演じる、ニック公証人事務所第二書記リオネルの詩人としての側面がばっさりと削られ、それに関係する場面、文言もすべて小説全体から削除、あるいは修正されてしまっているのである。超堅物ニックとその目を盗んで試作に励むリオネルとの間の発想のズレ、掛け合いのおかしさがこの作品の語りのリズムを豊かにしていたのに、手間暇かけてそれをすべて消してしまったのである。それは物語から笑いを奪っただけでなく、吹雪の中でリオネルに密かに自分の存在を知らせようとジャンがリオネルの詩の一節を誦するという劇的な結構なども不可能にしてしまう。今回、英語版には当たっていないが、はたしてこれほど改変したものをなおジュール・ヴェルヌの作品と銘打てるものかどうかという疑問さえ生じる。著作権の歴史には詳しくないが、このような翻訳（翻案？）がまかり通っていたところを見ると、この分野での仏米関係は当時まだ無法状態だった

のであろう。快訳している森田思軒には気の毒だが、日本の読者もこれをもってジュール・ヴェルヌの作品を読んだとは言えないかもしれない。

（東京学芸大学名誉教授）

＊

＜追悼・大原祐子名誉会員＞

大原祐子先生（1937-2017）

－日本におけるカナダ研究のパイオニア－

竹中　豊

「オーハラでございます」。電話の声は、いつも丁寧で心に響く美しい日本語だった。こうした**大原祐子**先生は、まぎれもなく日本におけるカナダ史研究のパイオニアだった。そのことに異論を唱える人はいないだろう。その先生が 2017 年 4 月 14 日、膵臓ガンのため天国へと旅立ってしまった。享年 79 歳。カナダ史研究の片鱗を濁した私にとって、その訃報はぬぐいきれないほどの深い悲しみを意味した。そして、ひとつの時代の終焉を決定的に実感させたのだった。

大原先生を知らない人も今や多くいると思われるので、まずはその足跡を簡潔にたどってみよう。元東京大学教養学部アメリカ研究資料センター助教授、日本カナダ学会創設時（1977 年）のファウンディング・メンバーの1人。とりわけ JACS を誕生させ、その発展とカナダ研究の基盤つくりに尽力した点で、初代会長の**馬場伸也**先生（元津田塾大学、のちに大阪大学）とともに、その貢献ぶりは計り知れないほど大きい。身長 150 センチそこそこの小柄な体、しかしバイタリティにあふれ、いつもにこやかな顔、気品ある知性、アルト調の低音での穏やかな話ぶり、知的傲慢さのかけらもない謙虚な態度・・・。あらゆる意味で、大原先生は JACS 創設当時の私たちの支えとなっていた。個人的には、もう尊敬を通り越して大原先生を”崇拝”していた由縁でもある。

カナダ史に関する論文・著書等をすでに多く刊行していた大原先生は、その業績が認められ、1987 年 4 月から筑波大学に赴任することになっていた。専門研究の場が用意され、これでますますカナダ研究に拍車がかかるにちがいない、と誰もが楽しみにしていた。

だが、突然悪夢が大原先生を襲う。1987 年 1 月 29 日、東京大学での授業中にクモ膜下出血で倒れたのだった。救急車で搬送され、初期対応および当面の危機状態は乗り超え、一命をとりとめたのは、不幸中の幸いであった。とはいえ、現状は脳神経にかかわる大変な病気であることにかわりなかった。その後3年間、いくつかの専門病院で懸命に治療とリハビリに励んだのだが、期待されたほどの回復には至らなかった、と聞いている。そして結果的には 1992 年から、横浜市戸塚区にある特養ホーム「太陽の國」にて生活を送ることになる。カナダの著名な歴史家故 **R. クック**先生や **H. V. ネルズ**先生（ともに元ヨーク大学教授）も、来日の際には、このホームでの大原先生を必ず見舞っていた。

思えば、大原先生が倒れたのは 49 歳の時 だった。歴史家としてまさに円熟期に入ろうとする矢先だった。その後、亡くなられる 79 歳までの 30 年間は、研究から離脱せざるを得ない療養および施設での生活だった。これほど無念なことはない。

大原祐子名誉会員（1999 年）

ところで、研究者としての大原先生を振り返ると、まずは立教大学でアメリカ史専門の清水博先生の洞察ある指導により、カナダ史研究への道を歩まれること

になる。卒業後の1970～73年にかけて、ブリティシュ・コロンビア州のビクトリア大学に留学され、研究の方向性を一層深める。大原先生は、カナダの大学でカナダ史を専攻する恐らくは初の日本人であった。

カナダ留学前になるのだが、山川出版社から世界各国史シリーズの一環として、『アメリカ史』（清水博編、1969年）が刊行され、同書の巻末に大原先生は「付録　カナダ史」の章を執筆された。当時、若気の至りで、私は大原先生に「カナダ史が、アメリカ史の“付録”扱いというのはおかしいのではありませんか？」と苦情を述べたことがある。すると、大原先生いわく「いやいや、この本の中で、“付録”としてでもカナダ史を扱っていただいただけで有り難いことだったのです」との返事だった。当時、日本でのカナダ史への関心度・理解度はこの程度だったのである。今から見れば、信じられないほど隔世の感がある。

大原先生は後年、カナダ研究の基幹書となる翻訳書も刊行される。それが、J.M.S. ケアレス著『カナダの歴史：大地・民族・国家』（山川出版、1978）、およびR. クック著『カナダよ永遠に：歴史とナショナリズムについて』（サイマル出版会、1984年）だ。今読んでも色あせていない。

他にももちろん論文・著書があるが、とりわけ大原先生の著作のなかで意義あるのは、私見ながら『カナダ現代史』（山川出版、1981）だと思う。それが、日本人研究者による初の書き下ろし版カナダ史だったからだ。しかも40代半ばの”若さ”で、一国の通史を上梓しているのである。これは大変な偉業だ。内容は思索的・分析的であるよりも叙述的・記録的との批判が一部あるかもしれない。たしかに「正確さ」は歴史家にとって「義務」であり、「美徳」ではない。にもかかわらず、こうした批判は、前人未踏のカナダ史の「事実」を正確に書くことがいかに難しく、いかに大変な作業であるか、それを知らぬ的はずれな批判だと私には映る。

さらに忘れてならないのは、大原先生の指導のもとで優れたお弟子さんが育っていったことである。現在カナダ史研究の第一線にある**細川道久**会員（鹿児島大学）や**木野淳子**会員（東京外国語大学）は、その好例だ。ご本人たちにとっては、いささかくすぐったい話かもしれないが、私からみると、あらためて大原先生の存在の大きさを感じるのである。

最後になるが、心に残る書物というものは、無機質的な「活字」を飛び越え、著者の生身の「人間」が見えてくるものだ。「肉声」も聞こえてくる。大原先生の場合がそうだった。私は、今でもこの“大原版カナダ史”を机の側から手放せないでいる。そしてあの言葉が懐かしい。「オーハラでございます」。

（元カリタス女子短期大学）

＊

大原先生、安らかに

細川　道久

大原祐子先生に初めてお目にかかったのは、1982年7月、東大駒場のアメリカ研究資料センター（現、アメリカ太平洋地域研究センター）だった。入室したもののカウンターには誰の姿もなかったため、「あの～、すみません」と思い切って声を出してみた。すると、「何か御用でしょうか」と丁寧な口調の返事とともに、奥の窓側の席から小柄な女性が出てこられた。本郷の学生でカナダ史を勉強したく思っており、大原先生に是非とも面会したい旨申し上げたところ、にこやかに「私が大原です」。張りつめていた緊張が一気に和らいだ。突然伺ったにもかかわらず終始穏やかに応対して下さった後に、「細川さん、一緒にカナダ史の勉強をいたしましょう」。

10月から立教大学大学院の木野淳子さんと私のために勉強会を開いて下さった。手始めのテキストは、Ramsay Cook et. al., *Canada: A Modern Study* だった（この書にあったイラスト「英米のはざまで」から受けた衝撃は大きく、拙著『カナダの自立と北大西洋世界――英米問題と民族関係』（刀水書房、2014年）の表紙カバーで使わせて頂いた）。その後、John Bartlet Brebner, *North Atlantic Triangle: The Interplay of Canada, the United States and Great Britain* とCarl Berger, *The Writing of Canadian History: Aspects*

of English-Canadian Historical Writing Since 1900 を読み進んでいった。勉強会は、ほぼ2週間に1度、センター閉館後から、遅めの夕食をはさんで9時半近くまで続いた。少しでも曖昧だと鋭く質問されることもしばしばだった。内容に関する説明をなさったうえで、さらに踏み込んだ解説をされ、深い読みとはこういうものだと身をもって知ることができた。もっとも、私は、テキストの予習もいい加減だったし、内容を十分に理解できたわけではなかった。不勉強で何度も音をあげそうになったのだが、それを救ってくれたのは、夕食タイム（宮川の鰻重をご馳走になることも！）だった。

卒業論文や修士論文でも、文献・史料・分析・執筆など、さまざまな点をご相談した。私の拙い話に耳を傾けて下さり、懇切丁寧なアドバイスを頂戴した。ご蔵書を貸して下さったり、国内にはない論文をカナダのご友人に頼んでコピーを取り寄せて下さったこともあった。不明な点があれば、先生ご自身で調べて下さったりもした。「ともに学ぶ」という姿勢を常に持っていらした先生は、まさに「教育者・研究者の鑑」だった。先生のお蔭で、カナダ史研究の面白さに引き込まれていった。

今にして思えば、当時の先生はご多忙の極みにあられた。アメリカ研究資料センターの移転計画・工事が進んでおり、日々奔走されていた（完成を楽しみになさっていたが、完成したのは、ご病気の後だった）。ご校務の傍ら、親友の Ramsay Cook 先生の『カナダよ永遠に――歴史とナショナリズムについて』（サイマル出版会、1984年）の翻訳や、馬場伸也先生との『概説カナダ史』（有斐閣、1984年）の編集をなさっていた。「今日刷り上がってきたのよ」と本を頂戴したときの感激は忘れられない。加えて、JACS やアメリカ学会の要職など、数多くの仕事を抱えておられた。恩師 J.M.S.Careless 先生の著作の翻訳『カナダの歴史――大地・民族・国家』（山川出版社、1978年）や、日本人の手による初のカナダ史通史である『カナダ現代史』（山川出版社、1981年）を著されていた先生は、カナダ史研究（カナダ研究）の文字通りのパイオニアにして牽引役であり、数々の重責を担われていたのだ。

鈍感な私は、そんなことも知らず、無理な相談ばかりしていたのだ。それでも先生は、「今度はどんなお話でしょう」とか、「何かわかりましたか」とか、いつも穏やかに接して下さった。JACS 年次研究大会や、カナダ大使館や国際文化会館でのカナダ研究セミナーに誘って頂き、JACS 会員の諸先生方を紹介された。カナダでは、「Yuko の学生さんだね」と錚々たるカナダ史研究者の先生方の厚遇を得たが、これもひとえに先生の幅広いご交友のお蔭だった。

1987年1月29日、悲劇が襲った。駒場の8号館、新川健三郎先生のゼミでのことだった。大原先生は、私が報告をするというので特別にお越しになったのだ。そして、先生がコメントをなさっているときに・・・・・・。

ご療養中の先生を最後にお見舞いしたのは、2007年11月。古稀を迎えられたとは思えぬほど、お顔の色がよかった。「細川さん、あなたは私の学生でしたね」と、昔と変わらぬ満面の笑みで迎えて下さった先生を前に、私はかつての出来の悪い学生に戻っていた。

私がまがりなりにも今あるのは、先生の学恩あればこそである。先生、本当にありがとうございました。　（鹿児島大学）

大原先生を囲んで　木野会員と私（2007年11月）

＜リレー連載＞

なぜカナダ研究をしているのか（第９回）カナダと私

榎本　悟

私のカナダとの出会いは、初めて外国に出かけていった 1978 年 6 月に始まる。当時、小樽商科大学で教員としての地位を得て、2 年目の夏、休暇を利用してアメリカ・ミシガン州立大学で大学教員のための研修セミナーを受講した。その後10日余りをかけて、カナダ国内を文字通り一観光客として旅行をした。今ではその時の記憶があまり鮮明ではないが、トロントからモントリオールまでの鉄道旅行、経営学では異端児ともいえるが、世界的に有名なミンツバーグ（H. Mintzberg）教授が勤務するマギル大学のコープで、大学名の入ったTシャツを購入して一人悦にいっていたことを思い出す。そしていつかこの大学で研究ができたらいいなと思いながら帰国した。

その後、上記勤務先の同窓会組織である「緑丘会」からのご支援で1年間の研究留学奨学金を頂けることになり、家族を帯同するため、安全性を考慮してアメリカよりもカナダのいくつかの大学に受け入れをお願いした。もちろん、マギル大学にも受け入れ可能か否かを打診している。ただし、最も早く受け入れることを約束していただいたのが、トロント郊外にあるヨーク大学であったため、1984年7月末から、この大学に受け入れてもらうことにしたのである。私の研究テーマは「カナダ企業の戦略と組織の関係」というもので、当時、ハーバード大学で教鞭を執られていたチャンドラー（Alfred D. Chandler,Jr.）教授の「組織は戦略に従う」という命題をアメリカ、イギリスをはじめとした国々で実証する試みがなされており、私はそれのカナダ版を実施しようというものであった。

ところが、カナダについて全くの門外漢であった私は、このテーマを実施することはなかなか困難であるということに気が付いていなかった。カナダの企業についての研究に着手した後すぐに、カナダは私の抱いているイメージとは全く異なるということがわかった。それは、カナダの経済は、オーストラリア同様、多くの大企業は多国籍企業の子会社であり、とりわけアメリカ企業の子会社で、カナダ人所有の企業は総じて小規模であることが判明した。したがって、カナダで問題にされていることは「カナダ企業の戦略と組織」というよりも、カナダにあるアメリカ系の子会社の役割をどのようにカナダ側で戦略的に位置づけて、伝統的に弱いとされるカナダ製造業の発展を図るのかということがカナダという国にとって、あるいはカナダの政策決定者にとって喫緊の課題であるということに気が付いた。もちろん、規模的に小規模であるとはいえ、カナダ人所有企業の成長をいかにして図るのかというテーマもカナダにとっては重要な課題であることに間違いはないのだが、それにもまして外資系企業を梃子にしてどのようにカナダの成長を図るのかということが重要なテーマであったような気がしている。

こうして、まずはとっかかりとしてカナダの経済とアメリカの経済との関係、そして外資系企業、とりわけアメリカ系子会社のカナダ経済における産業別比率（資産あるいは売上高）ならびに役割はどうなっているのか、といったことをカナダ滞在中にデータ収集することにしたのである。また同様にカナダ経済と日本経済との歴史的あるいは今日的関係、また日系企業のカナダにおける役割も同時にデータ収集することにした。

1985年8月に留学を終えて、すぐに日本カナダ学会の北海道支部に初めて参加させていただいた。1986年3月ならびに1987年3月に日本カナダ学会北海道支部で、「日本とカナダの経済」や、「日系企業のカナダでの役割」について発表した。同時に日本カナダ学会編集の『カナダ研究の諸問題』（1987年）の中でも「カナダにおける日系企業」という拙論をものしている。こうした研究はカナダの経済や経営をより深く研究するための序論的なもので、こうしたテーマを踏まえたうえで、当時カナダではアメリカ系子会社の役割の強化をどのように図るべきかという議論

が盛んに行われていたことを念頭に置いて研究を開始した。なかでも、アメリカ系子会社の役割の進化形として、アメリカ本社からの戦略に基づき、カナダ子会社はそれを忠実に実施する受動的主体としての役割から、カナダ子会社が主体的に開発し生産した製品を世界的に販売する能動的役割へと転換する世界製品開発戦略(World Product Mandates, WPM)を担う子会社にいかにして作り上げるのかということが盛んに議論されていた。とりわけ現ロンドン・ビジネス・スクール教授であるバーキンショウ(J. Birkinshaw)の一連の研究は、多国籍企業における親会社と子会社との関係についてこれまでの議論を一転させるうえで非常に重要な役割を担うものであった。遅ればせながら、私(1989)も世界製品開発戦略(WPM)についての拙論を『カナダ研究年報』に発表させていただいた。

その後、私の研究は、そもそもなぜカナダでは、自前の製造業の発展が遅れたのかということに関心を抱き、経済学的視点だけでなく、経営学的視点からアメリカ・ゼネラル・モータースにやがて吸収されたカナダの自動車会社、マクローリン自動車会社に関する研究を『カナダ研究年報』(1992)に掲載した。またこの研究の後付けのために野村基金(1994年)をいただき、クイーンズ大学に赴き、この大学のアーカイブズで原資料を参照した。その間たまたまマクローリン自動車会社の盛衰について出版していたロバートソン女史(Heather Robertson)とも面談し、いくつかの資料をいただいた。

またカナダ政府から研究奨学金(1996年、2001年)もいただいて、カナダにある日系企業の製造子会社が北米自由貿易協定(NAFTA)の成立とともに、どのような役割変化を遂げようとしているのか、また北米自由貿易協定成立以降、実際にどのような役割変貌を遂げたのかということを探るために、カナダにある日系企業を訪問してインタビュー調査を実施した。その成果の一部が『カナダ研究年報』(2001)に掲載された。

その後、カナダについての私の研究は、カナダと日本の関係についての進化(あるいは関係の希薄化?)、そして、カナダ研究それ自体としてではなく、国際経営の領域としての多国籍企業における親会社・子会社関係の研究へとつながっている。

以上のように、私の研究はいわば偶然の産物としてのカナダ研究であるともいえるかもしれない。しかしながら、カナダを研究することによって、私費渡航を含めて都合6回ほどカナダに行くことになった。この間、あまり研究者とのつながりを形成することが得意でない私にとって、いろいろな人のご協力とご支援をいただいたことで、今年(平成29年3月)定年退職するまで研究を持続することができた。あらためて関係者各位に感謝する次第です。

最後に一つだけ、残念に思うことはカナダ学会のメンバーに経済・経営系の研究者があまり多くないということである。これが改善されれば、カナダについての研究がより進化し、カナダと日本の経済的関係の希薄化も少しは改善されるのではないだろうか。

参考のために、私がカナダ学会関係に投稿した拙論を掲げておきます。

1. 「カナダにおける日系企業」日本カナダ学会編『カナダ研究の諸問題』所収(1987)
2. 「カナダにおける多国籍企業の将来」『カナダ研究年報』第9号(1989)
3. 「マクローリン自動車会社—カナダ国内自動車企業の消滅」『カナダ研究年報』第12号(1992)
4. 「在カナダ多国籍企業子会社の企業者活動—Birkinshawの所説を中心として」『カナダ研究年報』第21号(2001)

その他、日本カナダ学会編『メイプル豆辞典Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』(1993)(1994)(1996)

(前関西学院大学教授・岡山大学名誉教授)

＊ ＊ ＊

(((事務局より)))

◆第42回年次研究大会のお知らせ

2017年9月9日(土)・10日(日)、国立民族学博物館にて第42回年次研究大会が

開催されます。学会HP内（以下のURL）よりプログラム・報告要旨集がダウンロード可能となっております。

第42回年次研究大会プログラム・報告要旨集：http://jacs.jp/news/07/12/2153/

◆「トラベル・グラント」募集について

2017年度（2017年4月1日～2018年3月31日）までの間に、カナダおよびカナダ以外の国（日本を除く）で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。**(1) 支給人数と支給金額**：1名につき5万円・最大2名。**(2) 支給対象者**：募時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。**(3) 応募締切日**：2017年4月末および同年8月末日（年2回）。**(4) 応募書類**： ①本学会所定の応募用紙（日本カナダ学会のホームページに掲載）、②国際会議。などでの報告が正式に受け入れられたという文書（メールも可）、③出張に関する費用（航空運賃、滞在費、参加登録料など）の見積書。**(5) 審査方法**：日本カナダ学会理事会における審査機関（対外交流・社会連携委員会）により事前審査を行い、それぞれ5月および9月の理事会にて最終決定します。**(6) 出張後の義務**：①帰国後2週間以内に報告した論文を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書（学会ホームページ掲載の所定の書式）。**(7) その他の事項**：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額（10万円）が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。④書類送付先・問い合わせ先：〒658-0032　兵庫県神戸市東灘区向洋町中9-1-6　神戸国際大学経済学部下村雄紀研究室内　日本カナダ学会事務局。

◆『カナダ研究年報』第38号（2018年9月発行予定）の公募要項

（1）未発表の完全原稿のみ（採否の決定はレフリー制による）。**（2）原稿の種類**：「論文」（和文400字×50枚相当以内；英仏文A4判ダブルスペース25枚以内）;「研究ノート」（和文400字×20枚相当以内；英仏文A4判ダブルスペース10枚以内）；いずれも横書き、註・図版等含む。**（3）締切**：2018年1月末日。**（4）執筆要項請求先・原稿送付先**：〒305-8550　茨城県つくば市春日1-2　筑波大学図書館情報メディア系　溝上智恵子（80円切手貼付・あて先明記の返信用定型封筒を同封のこと）。

◆会費納入について（お願い）

現在会費の納入を受け付けております。前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去3年分（当該年度を含まず）の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うことになりますのでご注意下さい。**一般会員**：7,000円・**学生会員**：3,000円（学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと）。**郵便振替口座**：00150-2-151600。**加入者名**：日本カナダ学会。来年度以降、自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします（自動振替による口座引落は7月です）。ご協力願います。なお、4月以降に会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

第 42 回年次研究大会へのお誘い

JACS 第 42 回年次研究大会は、2017 年 9 月 9 日（土）・10 日（日）の両日、国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園 10-1、大阪モノレール万博公園駅から徒歩 15 分、近鉄バス・阪急バス停留所［日本庭園前］から徒歩 15 分）で開催いたします。国立民族学博物館での開催は、2009 年以来 8 年ぶりとなります。

今年 2017 年はカナダ建国から 150 年周年という記念すべき年です。そこで今回の大会では、**飯笹佐代子**会員（青山学院大学）を委員長とする企画委員会のコーディネートのもと、先住民と国家との関係と連邦結成 150 周年をテーマとするシンポジウムを 2 つ用意しています。9 日午後の一般公開国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」では、カナダより**アラン・マクミラン**先生（サイモン・フレーザー大学）を基調講演者に迎え、カナダ先住民社会を研究している文化人類学者 4 名とともに、多様なカナダ先住民社会の歴史と現状について検討します。10 日午後のシンポジウム「連邦結成 150 年」では、**スティール若希**会員（東京大学）、**丹羽卓**会員（金城学院大学）、**竹中豊**会員（元カリタス女子短期大学）がカナダの 150 年を振り返り、宗教問題や連邦制について議論します。

10 日午後には故ラムゼー・クック教授の追悼講演として同教授の高弟のひとりである**マルセル・マルテル**先生（ヨーク大学）をお招きし、「A Rare Bird on the Earth: Identities and Nationalisms in Ramsay Cook's Canada」という演題で講演をしていただきます。さらに、「自由論題」（ 9 日午前 ）のほか、「先住民をめぐる政策」（9 日午前・午後 ）や「戦後日系カナダ人史の新たな展開」（10 日午前）などの興味深いセッションを企画しています。2 日間でのべ 2 つの基調講演と 15 本の報告が行われ、文字通り地域・学際研究学会にふさわしい内容となっています。したがいまして、本大会はカナダ研究の最新の研究成果とすばらしさを堪能できる大会になると考えます。

また、国立民族学博物館の常設展示場では企画展「カナダ先住民の文化の力ー過去、現在、未来」を開催しています。研究大会参加者は無料で展示を観覧できますので、昼休みなどにぜひ見学していただきたいと思います。

最後にひとつお願いがあります。国立民族学博物館は千里万博記念公園の中にありますが、両者は別組織です。このため、公園を通行するのに入園料（250 円 ）が必要となります。これを回避するために、参加者の方には、9 月初めに無料通行証をメール添付で配布する予定です。研究大会に参加される方は、「第 42 回年次研究大会参加」の件名でお名前と所属を明記した電子メールを岸上伸啓宛（inuit@idc.minpaku.ac.jp）にお送り下さい。ひとりでも多くの方が参加されることを願っています。9 月に国立民族学博物館で皆さんにお目にかかれることを楽しみにしております。

大会実行委員長　岸上 伸啓（国立民族学博物館）

★編集後記・・・今年のカナダ・デーは、連邦結成 150 周年ということもあり、各地にて祝賀行事が開かれていたようで、関心を持ってネット等のニュースを見ておりました。たしかに 150 年前の 1867 年 7 月 1 日をもって、「建国」と捉えるかは議論の余地があるかもしれませんが、それでもカナダ史における重要な起点になっていることは疑いようもありません。本号でも案内されているように、9 月の年次大会にて「連邦結成 150 周年」のシンポジウムも予定されておりますので、今から楽しみにしております。・・・・・・・・・・・(f)